

コミュニケーション接続に関する社会学教育
—論文構造設計シートを利用した社会学教育の試み—

Sociological Education on Connecting Communications
— A Trial of Sociological Teaching making use
of “Article Structure-Design Sheet” —

西 脇 裕 之
NISHIWAKI Hiroyuki

Sociological perspective has become more significant today. We wish students take sociological perspective at class of sociology as liberal arts education. In this paper, based on my trial of education, I outline sociological education making use of worksheet called “article structure-design sheet”, and I assert that the question-answer sequence of the worksheet will make students’ learning of sociology performatively effective.

1. 問題の背景と本稿の目的

1-1 教養教育としての社会学

社会学系の演習, 実習などの授業ではフィールドワークが重要であり, 学生たちが社会を体験する場を創出・提供することが教育において求められるのは言うまでもない。筆者も札幌市内を中心に散発的ではあるが, 演習や実習の授業においてまち歩きのフィールドワークを実施してきた。

しかし, 社会学の入門的な講義や教養教育の一環としての社会学においては, 事情はいささか異なると考えられる。よく言われるように, 社会学は政治学, 経済学, 法学などと違いその対象を具体的にイメージしにくく, 特定の限定された領域を対象とした学問というよりも, その「ものの見方」の独自性によって特徴づけられる学問である。そうした独自

性や面白さが理解できない学生をフィールドワークへ連れ出しても、フィールドでの意外にも(?)地味な作業(ワーク)の意義は伝わりにくい。

そのため、教養教育としての社会学は、社会的な考え方・ものの見方を伝え、パースペクティブとしての社会学を身につけさせることをめざすべきであろう。学生たちが今までそしてこれから生きていく社会に向きあう際に、常識とはいささか異なった考え方やものの見方を通して現にある社会が別様でもありうる可能性を示すこと。社会学を一つのパースペクティブとして提示することが、そのねらいの中心となる⁽¹⁾。

入学したばかりの1年生を主な受講者として想定し、社会的な考え方・ものの見方を伝えるためには、片桐新自(2008:442)が述べるように、最低限の基本的概念や著名な社会学者を教えるよりも、社会学がカバーしうる広範な領域からさまざまな社会現象を選び、社会学というメガネをかけて見るとどのように見えてくるかを示す、アラカルト方式の展開の方がよいと考えられる。

しかし、もう一方では、社会的な考え方やものの見方が凝縮されているのが社会学のキー概念であるとするれば、概念の構造とその適用可能性をめぐる理論的考察も不可欠となる。教養科目としての社会学の目標は、そうしたキー概念を理解すること、さらに求めればそうした概念を使って事態を記述できるようになることが科目としての目標となる。

1-2 本稿の目的

本稿は以下の2点を目的とするものである。まず、筆者がかつて奉職していた大学で担当していた社会学の教養科目「人間と社会」において、授業のテーマに関して「問い-答」の連鎖をつくる論文構造設計シートという教材を利用した試みを紹介し、この学習方式が、社会がコミュニケーションの接続連鎖として成立しているという学習内容をいわば行為遂行的に確認する方法であることを示すこと。第二に、この論文構造設計シート方式を宇田光のBRD(当日ブリーフレポート)方式など他の同

様の授業改革の方式と比較してそのメリット・デメリットについて考察し、J.M.ケラーが提唱するARCS動機づけモデルに照らして評価することである。

1-3 実践事例の授業科目の概要

今回取り上げる事例は、2008年度前期に札幌国際大学の1年次配当の共通科目「人間と社会」において行った教育実践である。当該年度の学期では同一科目を2クラス(履修者はそれぞれ172名と116名)展開し、いずれの授業でも論文構造設計シートを用いた。なお、当該科目のシラバスには以下の点(表1参照)を掲載しておいた。

表1 人間と社会のシラバス(抜粋)

<p>●講義の目的および概要</p> <p>人間も社会もコミュニケーションのつながりによって成立している。この授業では人間と社会を織り成すコミュニケーションについて、さまざまなトピックを紹介していく。また、授業内容をワークシートを使って整理することで、要約し構成を組み立てる力を高めていく。</p>
<p>●講義方法</p> <p>配布資料をもとに講義を行い、授業中に何回かワークシートを作成してもらおう。中間試験を実施し、定期試験の小論文に備えてもらおう。</p>
<p>●到達目標</p> <p>人間と社会を織り成すコミュニケーションの特徴を理解する。授業内容を筋道立てて再構成する能力を高める。</p>
<p>●試験方法・成績評価方法</p> <p>授業中に書いてもらおうワークシート(40%)、中間試験(小論文形式、10%)、定期試験(小論文形式、50%)によって評価する。</p>

1-4 事実確認的／行為遂行的

さて、この授業の特徴は、シラバスにも記載したとおり授業中に頻繁にワークシートを配布して記入させるところにあった。15回の授業のうち1回目はガイダンス、7回目は中間試験、15回目はまとめてそれぞれ充てたために、実際にトピックを論じたのは12回であったが、その中で9回ワークシートを書いてもらった。授業の最初にワークシートを配布した上で講義を行い、授業の最後15～20分程度の時間でワークシートを記入させ提出させた。教員は回収したワークシートを採点して次回に返却し、振り返りの解説を行った。

コミュニケーションの接続連鎖が社会を織り成し、人間はそうしたコミュニケーションの通り管であり、またその産物である。こうした認識を伝え共有することが教員側の意図であるが、そうした伝達コミュニケーションの場が、教員が一方的に講義をし学生はただノートをとるという形式に限定されてしまえば、授業内容の「事実確認的 (constative)」なメッセージを授業形式が「行為遂行的 (performative)」に裏切ってしまうことになる。

「事実確認的／行為遂行的」とは、言語行為論を創始したJ. L. オースティン (Austin 1960=1978) が、約束、宣誓、謝罪などの発語内行為の効力に注目する際に導入した区別である。オースティンによれば、事実確認的発話とは世界の事実を記述する発話であり、その真偽を問うことができるのに対し、行為遂行的発話とはその発話をするにおいて何らかの行為を遂行することになる発話である。行為遂行的発話は自分の行うことを記述しているわけではなく、言うことにおいて行為しているのであるから、その真偽を問うことはできず、代わりにその発話が適切か不適切かが問題となる。

この区別をこの授業に適用してみると、社会はコミュニケーションの接続連鎖から成るという事実確認的なメッセージをただ一方的に伝えるだけでは、教員と学生が教室に共在していても行為遂行的にはコミュ

コミュニケーションの接続を志向せず、社会が立ち上がっていかないということになる。学生にとってみれば学んでいる方法が学ぶ内容を裏切ってしまうことになる。教員が講義し、学生がノートをとる。これもコミュニケーション接続の一つのあり方ではあるが、コミュニケーションの接続連鎖という学習内容を、学習方法に反映させて、学生がよりアクティブにコミュニケーション接続を体験できるような仕掛けが求められる。そこで、学習内容と学習の方法の相即性を保証するような活動を授業内に組み込むことにした。その方法が後述する論文構造設計シートに記入させる方式である。

2. コミュニケーションの接続連鎖としての社会

2-1 授業展開

この授業では、コミュニケーション接続連鎖が社会を織り成し、人間はそうしたコミュニケーションの産物であるという社会学的なものの見方を伝えていくために、コミュニケーションに関するさまざまなトピックを取り扱った。以下に15回の授業展開の概要を示す。なお、下記に出てくる【WS①】とは論文構造設計シートの作成の1回目を意味する。

①ガイダンス：授業の進め方についてのガイド。

②急ぐ者が理解する：「わかる」ことがコミュニケーションを閉じてしまう危険をとまなうことを、学生同士のおしゃべりの事例から考える。

【WS①】

③まちがい主義：可謬主義の考え方を紹介し、そうした想定のもとでもコミュニケーションが成立しうるのか考える。【WS②】

④沈黙交易：沈黙交易をコミュニケーションの限界的な事例として紹介し、なぜそれが継続しえたのか、純粋なコミュニケーションという観点から考える。【WS③】

⑤糸電話モデル：社会的コミュニケーションを糸電話モデルが想定しているような有益な情報の送信－受信として捉えてよいか考える。

【WS④】

⑥ことばの継ぎ穂：「継ぎ穂」としての言葉が担うコミュニケーションの交話的機能を紹介し、現代におけるその過剰の実態について考える。

⑦中間試験：それまでに扱った3つのテーマから1つ選択して小論文を作成させる。

⑧気持ちのわかりあい：日本的なコミュニケーションの特徴を示し、気持ちのわかりあいの感覚の生成から崩壊までの過程を地域移動・社会移動の頻度の関数という観点から考える。【WS⑤】

⑨⑩相手の身になる：G. H. ミードのコミュニケーション論を紹介し、相手の身になることの重要性について考える。【WS⑥】

⑪集団討議のゆくえ：集団で話し合うことが常に一人で決めるよりも慎重な決定を下すことにつながるのか考える。【WS⑦】

⑫自由からの逃走：ナチズムの台頭を例に、権威主義的なコミュニケーションや組織の問題点について考える。

⑬無責任の構造：属人主義の特徴を示し、それが組織にもたらす問題点について考える。【WS⑧】

⑭学びの態度：沓を落とす人のエピソードを例にして、学びの態度において重要なことは何かを考える。【WS⑨】

⑮授業をふりかえる：まとめと成績評価および定期試験に関する指示。

2-2 G. H. ミードのコミュニケーション論

授業展開のうち理論的な中心となったのは、⑨⑩と2回をかけて展開した「相手の身になる」である。ここではプラグマティズムの哲学者であり社会心理学者でもあったG. H. ミードのコミュニケーション論を紹介した。コミュニケーションは後続するコミュニケーションの接続をまって意味が付与されるという、この授業で最も伝えたかった重要な認識も以下にその概略を示すミードの着想にもとづいている。

ミードは動物のやりとりや人間の相互行為の過程を、刺激と反応の相

互連鎖の過程として記述してみせた。ミードによれば、「対象はすべてわれわれ自身のなかに反応を呼びおこし、それらの反応が対象の意味あるいは本性である」。意味とは社会的行為の一定の局面の間の関係として客観的にそこにあるもの（something objectively there）が発達したものである。

ミードはわれわれの対象の意味理解の基礎を、他人や事物の態度を取得するという生理学的なメカニズムに求めた。態度取得とはいわば相手の身になってしまう現象である⁽²⁾。その上で、人間の話し言葉（ミードは音声身振りと呼ぶ）がもつ、相手にとって刺激となると同時に自分にとっても刺激となるという特性は、自覚的に相手の立場に立つ役割取得能力を発達させた。

コミュニケーションの意味も「対象の意味とはそれがわれわれ自身のなかに呼び起こす反応である」という観点から、送り手の意図ではなく、それに後続する反応と関連づけて考察される。身振りの意味は、自分の身振り、それが引き起こす相手の反応——それが再び自分にとっての刺激となる——、その結果として進行する相互行為という、三つの項の関係によって規定される。これら三つの項はいずれも客観的に観察可能なものであり、この相互参照の過程では送り手の主観的な意図は直接は関与してこない。

ここからは、以下の含意が引き出せる。まず、人は自らのコミュニケーションの意味を直接知ることはできず、相手の反応を通じて間接的に知るといふこと。ここにはC. H. クーリーの「鏡に映った自己」⁽³⁾と同様の論理が働いている。第二に、コミュニケーションの意味は、そのコミュニケーションが完了した時点で確定してしまうのではなく、つねに未来に後続するかもしれないコミュニケーションに対して開かれているということ。その後のコミュニケーションの進行如何に応じて、コミュニケーションの位置価は変化していくのである。

3. 「問い—答」の連鎖としての論文構造設計

3-1 論文構造設計シートとは

上述のような社会学的なものの見方という学習内容と方法との間に相即的な関係をつくり、学習において行為遂行的に学習内容を再確認させるための教材として、論文構造設計シートを利用した。

論文構造設計シートとは、その時間に学習した内容を小論文に再構成してまとめるための構造設計表である。論文とは構造化された文章であるから、論文の作成にあたって構成づくりの作業が必然的にとまらう。その構造設計を「問い—答」の連鎖というフォーマットに則って行うためのワークシートが論文構造設計シートである。

たとえば、G. H. ミードのコミュニケーション論を扱った回では、テーマとして「ミードのコミュニケーション論では、どのような点で『相手の身になる』ことが重要なのか」という問題を提示する。その上での問いとして「送り手の身になることが重要なのはどんな局面か」、「受け手の身になることが重要なのはどんな局面か」という問いが続く。それぞれの問いに対して解答を与えると、さらにその解答に対する問いが続くというように、「問い—答」の連鎖がつけられていく。

学生はこうした一連の問いに解答していくことで、論文構造設計表を完成させ、授業終了時に提出する。なお、授業内では論文の構造設計にとどめ、論文そのものの執筆は行わない。

3-2 「問い—答」の連鎖

論文構造設計表のアイデアは、実は大学教育における授業実践ではなく、岡田寿彦の大学の論文入試の参考書から得たものである。なぜ論文の執筆に先立って「問い—答」の連鎖をつくる必要があるのか。岡田（1991：6-12）は論文の構造設計の仕方を解説するにあたって、まず、問題とは何か、論文とは何かを確認している（表2参照）。論文とは主題について問いをつくり、答として自分の考えを述べる。その答に対して

他者の立場に立って問いかけ，さらにその問いに対する答として説明を加えたものである⁽⁴⁾。図1はそうして「問い－答」の連鎖が作られる過程を図示したものである。

表2 論文とは何か [岡田 (1991 : 7, 11) より抜粋]

- ある「主題」を「問題」に「する」とは，その「主題」についての「問い」を「つくる」ことである。
- 論文とは，「問い」に対する「答」としての，自分の「考え」を述べ，その「考え」が読者によくわかるように「説明」を加えた文章である。
- 「説明」とは，現実の他者あるいは想定された他者からの「問い」に対する「答」である。

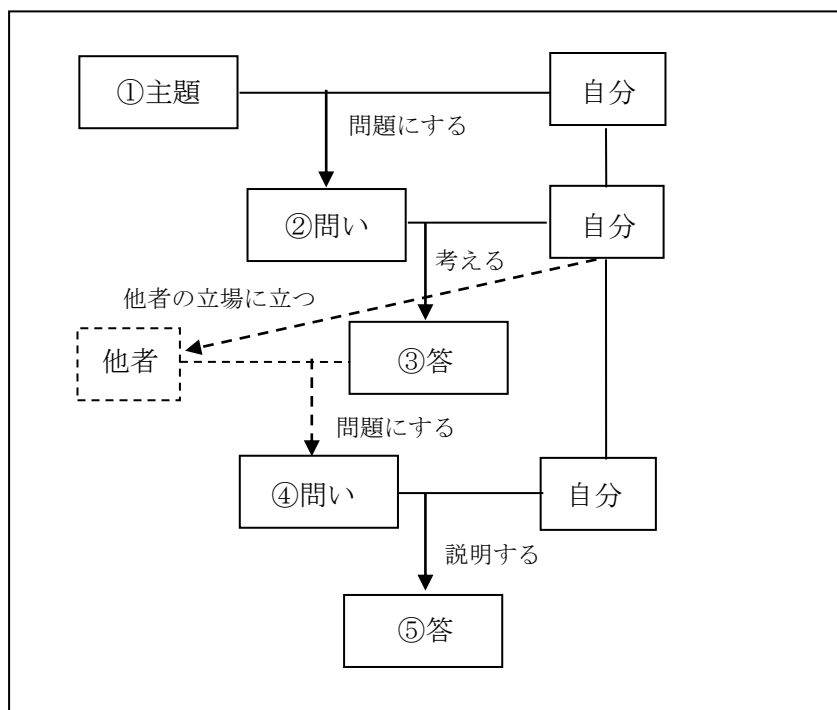


図1 「問い－答」の連鎖 [岡田 (1991 : viii) をもとに筆者が作成]

学籍番号 _____ 氏名 _____

本日のテーマ なぜ都市は飢えないのか。

問	食糧問題のパラドックスとは何か。	
答		
問	なぜ食糧を生産しないのに都市は飢えないのか。	
答		
問	なぜ農村は自らが飢えても都市に食糧を供給し続けたのか。	
答		
問	都市で大量の餓死者が出るのはどんな場合か。	
答		
問	権力の正当性が危機に陥るのはどんな場合か。	
答		
問	なぜ権力は農村の食糧確保よりも都市の食糧確保のほうを優先したのか。	
答		
問	反都市主義的性格を備えていた社会主義の実験からわかることは何か。	
答		
問	ポル・ポトの失敗とは何か。	なぜ都市がないと統治がうまくいかないのか。
答		
問	都市が飢えない理由について、食糧を自ら生産せずに買い入れるからこそ飢えに強いのだとする説がある。簡単に説明せよ。	
答		

*(評価欄記入不要)
評価:

図2 論文構造設計シートの実例

論文構造設計シートは、他者からの問いかけに対する自己の応答というコミュニケーション接続の連鎖を、自問自答の自己内対話に変換して紙媒体の上で実践させるワークシートである。この授業でも中心的に取り上げたミードのコミュニケーション論では、相手の身になるあるいは他者の立場に立つ役割取得が重要な契機となっているが、自らに問いかけることは自分の答を吟味する他者の立場に立つことで可能となる。筆者が実際に授業で用いたワークシート⁽⁵⁾を図2に示す。

大学の講義における論文構造設計表の利用については、桜井芳生(2004)が実践例を紹介している。桜井は90分の授業時間のうち教員による講義は1時間強にとどめ、残りの時間でその日のテーマに即したミニ論文構造設計表を、パソコンを使って執筆させている。たとえば、「インターネットは、グローバルブレインか?」といった問題を提示し、それに対する「賛成」「反対」「条件つき賛成」「条件つき反対」など各自の解答を明示させる。それに対して「なぜ賛成(反対)か」という問いを立てさせ、それに対する返答を書かせ、さらにその返答に対する問いを立てさせ、返答を書かせるというフォーマットで続けさせる。作成した論文構造設計表は、教員に電子メールで送信させる。

桜井はこの問い-答の連鎖を重ねていくフォーマットを「一人ディベート方式」とも呼んでいるが、この方式を5回くらい続けていくと、学生が書く文章が急速に「弁証的・弁論的」になっていく、という。なお、桜井も小論文そのものの執筆は期末試験時に回し、その際の材料として提出させた論文構造設計表を利用させている。

論文作成に先立ってこうした問いの連鎖を作ることの効果については、向後千春(2000:214-216)も指摘しており、問いを積み重ねていくことが、深く考え、常識やありきたりの考えにとどまらない別の見方を発見することにつながると述べている。

3-3 なぜ問いを決めてしまっているのか

さて、論文の構成づくりは、本来、自問自答を繰り返す形で問い一答の連鎖を作り出すものであり、問いも自分で立てるべきであるが、本授業で使ったワークシートでは問いはすべて教員が立ててあらかじめ書き込んである。いわば、すでに半分構造化された論文構造設計シートなのである。

この年度以前にも試験的に論文構造設計シートを使ったことがあるが、その時は問いを学生が自由につくっていくワークシートにしていた。しかし、1年次の授業であるという事情もあり、学生の多くはオープンな形式のワークシートではあまりに自由度が高すぎて、適切な問いの連鎖をつくっていくのに困難を覚えていたようであった。これでは、学習への意欲を高めることにはならない。そこで、2008年度の授業で利用した論文構造設計シートの問いはすべて教員側で記入しておいた。

問いがあらかじめ決まっているために、学生が実際に小論文を執筆する際には自由な構想の余地が制限されることになる。しかし、一方で学生は定められた問いに答えながら構造設計表を完成させることで、学習した内容について筋道だった理解を得ることができる。また、後述のように、学生の学習意欲を引き出す上で、「やればできそうだな」という自信を与えることが重要である。「がんばればできそうだ」と思わせるためには、課題のハードルを高すぎるところに設定するわけにはいかない。スモールステップの問いに答えていき、最終的に論文構造設計シートを完成させるだけでも学習効果は高く、学生の達成感も得られると判断した。

プラトンは『メノン』という対話篇において、有名なメノンのパラドクスを提示している。対話篇の中で「人は何を探求すべきかということも知らない状態で、自分の知らないものをどうして探求できるのか」というメノンの問いに対して、ソクラテスは「探求し学ぶということは、魂が生前に得た知識を想起することである」という想起説を提示して答

え、その正しさを説明するためにメノンの召使に幾何学の問題を解かせるという実験をして見せる。

このパラドクスに対する想起説という解答の妥当性はともかくとして、ここで注目したいのは、メノンの召使に幾何学の問題を解かせる際に、プラトンがソクラテスに「ぼくのほうは質問するだけで、教えはしない」と語らせている点である。ソクラテスは確かに答を教えてはいない。しかし、問いの連鎖を重ねていくことで、召使を正答へと導いていく。ソクラテスが「ただ質問した結果として」、召使は「自分で自分の中に知識をふたたび把握し直す」のである。

構造化は行為の自由度を制限する一方で、次はどうすればよいのかという見通しを立てやすくする効果がある。今回利用した、事前に半ば構造化された論文構造設計シートも、教員側が用意した問いの連鎖によって学習した内容が構造化されることで、単なる問いの集まりである小テスト等とは違った教育効果を上げているものと考えられる。

4. 構造設計から小論文へ

4-1 小論文作成へ

提出されたワークシートは、A、B、Cなどの評価をつけた上で次回返却した。返却とともに、改めて前回の授業内容を振り返り小論文としての構造を意識した解説を加えた。

通常の授業時間中には、学生は実際に小論文を書くことはしない。中間試験や定期試験の際に、授業中に作成した論文構造設計シートを見ながら、小論文を書くのである。中間試験では、それまでに論文構造設計シートを作成させた3つのテーマのうちから1つを選ばせて、40分間で小論文を作成させた。定期試験では同様に6つのテーマのうちから2つを選ばせて50分間で2本の小論文を作成させた。いずれの試験も、論文構造設計シート、ノート、配布資料の持ち込みを認めて実施した。

4-2 「起承承承（結）」のスタイル

小論文の作成にあたっては、文章構成を「起承転結」ではなく「起承承承（結）」のスタイルで書くことを指導した。「『起承転結』というのは、もともとは漢詩の構成法の一つである。『起』で詩をはじめ、『承』でそれを受けつぎ、『転』は一転して別の境地を開き、『結』でまとめる、という構成法」（向後 2000：168）である。

レポートや論文についても起承転結の構成で書くことが指導される場合があるが、無理にそのフォーマットに押し込めようとするとう窮屈になり、かえって文章が書きにくくなることがある。特に「転」にあたる論述が難しい。「転」で意外な事実や別のものの見方を導入するという構成は、「社会から距離をおいて、斜めに見る」（盛山 2011：4）という社会学のアプローチにふさわしいと言えるのかもしれないが、新たな風景を切り開いて見せる職人芸的な技量が要求されてしまう。

それに対して「起承承承（結）」とは、「起」で問いの提示と主張を行い、続く「承」で主張を支える根拠やアイデアを書く形式である。「承」以降は延々と問いに対する答という形で根拠を積み重ねていく論述スタイルであり、科学研究において仮説を確証するためにさまざまな事例研究や追試験を重ねていくことに対応している。最後の「（結）」はまとめであり、省略してもかまわない。

一般に科学研究の基本的手順は以下のようなものである。①不思議な現象や問題を発見し、②その現象のメカニズムに関する仮説を立て、③検証する、さらには④検証された仮説にもとづいて対応策を模索する。論述スタイルをこの手順に対応させるのであれば、起承転結よりも、最初に問いを提示して自分の主張を述べてしまい、それを承けて根拠を積み重ねていく「起承承承（結）」の方がよりふさわしい。

その後にかかせる小論文の論述スタイルとの整合性を保つために、論文構造設計シートの方も、起承承承（結）のスタイルで問い-答の連鎖をつくるようにした。

5. 論文構造設計シート方式の評価

5-1 授業改革の他の方式との比較

宇田光（2005）は、講義の改善の試みを重ねる中で BRD（当日ブリーフレポート）方式というユニークな方式を編み出した。講義の冒頭で当日のテーマを発表し、講義の時間内に A4 版用紙 1 枚のレポートをまとめさせるのである。授業はテーマ確認、構想段階、情報収集段階、執筆段階という 4 段階を経て進行していく。この方式の特徴は、実際にレポートを時間内（約 20 分間）に完成・提出させることと、教員による説明が行われる情報収集段階の前に、授業内予習とも言える構想の段階が組み込まれていることである。構想段階には 10～20 分間の時間が充てられるが、宇田によればこの段階こそが動機づけの観点からも決定的に重要だとされる。

論文構造設計シート方式と比較すると、BRDの方が学生にとって表現の自由度が高くまた要求される目標も高く設定されていることは明らかであり、学生のやる気や達成感を大いに刺激すると考えられる。しかし、あまりに高いハードルは逆に学生の学習意欲を減退させてしまう恐れがある。筆者としては、授業の内容を構造化して再構成することで学生の自信と満足感を高める論文構造設計シート方式の方が、1 年次の教養科目にはふさわしいと考える。

また、質問を促すことの重要性に注目した授業改革の方法として、田中一（1999）が考案した質問書方式がある。教員の講義というコミュニケーションに対して学生に積極的に質問を書かせ、さらに教員がそれに回答するという形でコミュニケーションの接続が連鎖していく。しかし、質問書方式では学生は質問という反応を返すにとどまり、BRD方式や論文構造設計シート方式のような作品をしあげる方式に比べると、課題にチャレンジして達成するという満足感には欠けると考えられる。

5-2 ARCS動機づけモデルに照らした評価

アメリカの教育工学者 J. M. ケラーは授業を魅力あるものにし、学習への意欲を高めるために、授業や教材を図3に示した4つの側面から点検することが有効だとして、ARCS動機づけモデルを提唱している。

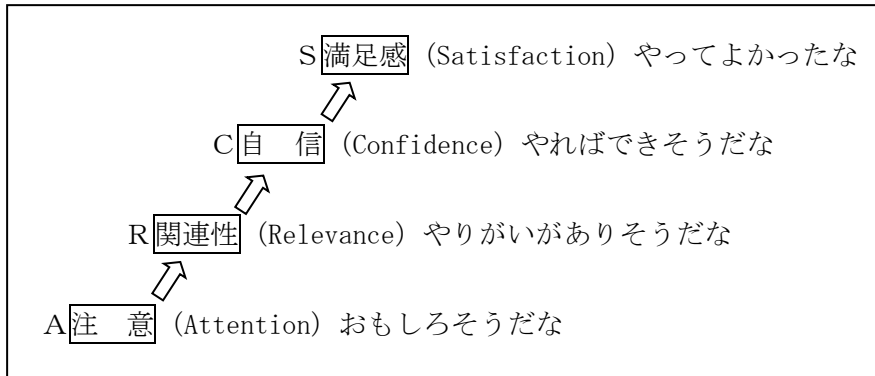


図3 ARCS動機づけモデルの4要因

筆者が利用した論文構造設計シートを、この4要因の側面から評価してみよう。

①注意：毎回、講義資料以外にA4版1枚のワークシートが配布される。論文構造設計シートには本日のテーマとともに、一連の問いの連鎖がすでに記入されており、話の流れを把握しようとする探求心が喚起される。

②関連性：答の欄は講義で学んだ内容をただ書き留めるのではなく、問いに対する解答として適切な文章となるよう自分なりの言葉で整理して記入するようになっており、目標に向かうチャレンジ精神をくすぐるような工夫がされている。

③自信：問いの連鎖がすでに記入されていることで、学生は半ば構造化されたワークシートに解答していけばよい。論文構造設計が完成した状態をイメージすることができ、がんばればできそうなレベルの課題であるということを知って、意欲的に取り組める。

④満足感：半ば構造化されたワークシートであるが、適度に時間をかけながら、最終的に授業のポイントが整理されたワークシートを自分の手で完成させることになり、学生は達成感を味わうことができる。

このように、半ば構造化された論文構造設計シートは学生の意欲を高める教材としての条件を十分満たしていると言える。

5-3 今後の課題

再三述べてきたように今回使用したワークシートでは、「本日のテーマ」を示した上で、問いの連鎖を教員側ですべて作りこんでおいた。論文構造の設計の半分以上は教員側が行ったわけである。これにより、各回の授業内容の要点を小論文で表現可能な「起承承承」の流れに整理した上で講義を行うことになる。いわば、試験問題を作成した上でそれにもとづいて授業を行うわけである。試験問題を最初につくってしまうことで、何に関してどこまでの理解を求めるのか、成功の基準が明確になるというメリットがある（授業の準備において、従来以上に教材作りに時間をかけざるをえなくなるのも事実であるが）。

しかし、やはり本来であれば問いを立てることも含めて学生に論文構造設計の主な部分を任せるべきであろう。発想の豊かさはそもそもどんな問いを立てるかということにかかっている。最初は教員側は半分構造化したシートを用いても、回数を重ねるにつれて学生のフリーハンドの余地を広げていくことが望ましいと考えられる。

また、これまでの論からもわかる通り、論文構造設計シート方式は教育効果が大いに期待できるものである。しかし、今回紹介した授業実践は試験的なものにとどまっており、その教育的効果の客観的な測定は全く行っていない。教材としての形成的評価も不十分である。今後の研究の積み重ねと教材のさらなる改善が必要である。

[註]

- (1) 櫻井義秀は、自らが編著者となった社会学のテキスト(櫻井他 2014)の内容を社会学分野の参照基準と対応させて検討した論考の中で、以下のように指摘している。「社会学の面白さや考えるコツを教えるのはなんといっても教養の社会学である。そして、社会学の社会的イメージを上げるかどうかは、学部必修科目よりも教養や学部自由選択科目で履修した社会学なのである」(櫻井 2015: 22)。
- (2) ミードの言う「態度取得」とほぼ重なる事態について、佐藤義之(佐藤 2014)は「共鳴的態勢」という概念を用いて、現象学の立場からより詳細に記述している。
- (3) クーリーの「鏡に映った自己」とは、以下のような考え方にもとづく社会学的自己論のアイデアである。人は自分の顔や全身像を直接見ることはできない。ただ鏡に映すことでその様子を知ることができる。同様に人は他人という鏡に自分の姿を映して、相手からの反応を得ることで、初めて自分の行為の意味や自分という人間がどんな存在か知ることになるのである。
- (4) 戸田山和久は、論文とはどんな文章かと問いを立て、以下のような定義をもって答えている。論文とは「(1) 与えられた問い、あるいは自分で立てた問いに対して、(2) 一つの明確な答えを主張し、(3) その主張を論理的に裏づけるための事実に・理論的な根拠を提示して主張を論証する」(戸田山 2012: 42) 文章である。
- (5) ここに掲載した論文構造設計シートは 2008 年度のものではなく、2013 年度に筆者が本学の 1 年次後期の社会学基礎の授業で使用したものである。

[参考文献]

- Austin, J.L. 1960 *How to Do Things with Words*, Oxford UP. (=1978 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店.)
- 片桐新自 2008 「社会学教育の意義—大学での社会学の学び方、活かし方—」, 『社会学評論』, 第58巻第4号: 437-455.
- 向後千春 2000 「『書く力』がつく最強最短プログラム」, 荒木晶子, 向後千春, 筒井洋一『自己表現力の教室—大学で教える「話し方」「書き方」—』情報センター出版局, pp.117-224.
- 向後千春 2015 『上手な教え方の教科書—入門インストラクショナルデザイン』技術評論社.
- 岡田寿彦 1991 『論文って、どんなもんだい—考える受験生のための論文入門—』駿台文庫.

- プラトン 1994 『メノン』[藤澤令夫訳]岩波書店.
- 櫻井義秀 2015 「自著紹介 櫻井義秀・飯田俊郎・西浦 功編『アンビシャス社会学』—社会学分野の参照基準との対応—」,『現代社会学研究』28:21-34.
- 櫻井義秀・飯田俊郎・西浦 功(編著) 2014 『アンビシャス社会学』北海道大学出版会.
- 桜井芳生 2004 「メディアのダーウィニアン社会学序説—IT時代における『内職・私語封じ』にもなる『大学授業改善(FD)テクニク』の紹介もかねて—」,『地域政策科学研究』創刊号:45-69.
- 佐藤俊樹 2005 「閉じえぬ言及の輪—意味と社会システム—」,盛山和夫・土場学・野宮大士郎・織田輝哉 編著『〈社会〉への知/現代社会学の理論と方法(上)』勁草書房, pp.101-120.
- 佐藤義之 2014 『「態勢」の哲学—知覚における身体と生』勁草書房.
- 盛山和夫 2011 『社会学とは何か—意味世界への探究—』ミネルヴァ書房.
- 鈴木克明 2002 『教材設計マニュアル—独学を支援するために—』北大路書房.
- 多田光宏 2007 「社会システムとしての相互行為」,『社会学史研究』第29号: pp.73-86.
- 田中一 1999 『さよなら古い講義—質問書方式による会話型教育への招待—』北海道大学図書刊行会.
- 戸田山和久 2012 『新版 論文の教室—レポートから卒論まで』NHK出版.
- 宇田光 2005 『大学講義の改革—BRD(当日論文方式)の提案—』北大路書房.

(にしわき ひろゆき, 札幌大谷大学社会学部准教授)